

# 櫛木城跡調査報告書

波田町教育委員会

## 目 次

I. 檳木城跡歷史的考察 .....	1
II. 地 形 .....	3
III. 土 壤 .....	12
IV. 植 生 .....	

## 櫛木城跡歴史的考察

櫛木城跡は、波田町上波田の西光寺跡と呼ばれる梓川河岸段丘上に位置し現在は農耕地となっている。城跡の西側は男女沢が侵食した深い渓谷を自然の要害場に利用し、東側には人工になる空堀が段丘崖を区画しておよそ5反歩ほどの区域が中世武士の居館（内城）の遺構を現在に伝えている。

城館跡の一隅に昭和27年建てられた「史蹟碑」には、「寛正三年小笠原四天王、櫛木政盛築城波田郷地頭職居館趾なり、無量山再興寺のち儀応山西光寺靈場跡、元禄四年破壊退転、仁王門、阿弥陀堂現存なり」と記銘されています。

櫛木城は建武の新政により信濃守護となり府中（松本市井川城）へ入った小笠原氏が、初め反小笠原勢力であった安曇郡西牧郷（梓川村）の西牧氏を押さえ、また飛騨・木曾方面の勢力に備えるために、梓川谷の出口にあたる上波田の光明山峰に波田山城を詰め城として築き、根城には内城を作り、有力な櫛木氏の軍団を常駐させたものと推定されます。

『笠系大成一二木家記』には『小笠原殿甲州より信濃屋形に御居り候、其時御供は標葉・下枝・小曾・櫛置これ四天王なり……畠・竹田は櫛置の流れなり……』と書かれています。

『大塔軍記』で有名な櫛置石見入道清忠は当時小笠原氏の信濃守護代官という重臣であり、このとき櫛置五郎太郎、波田小次郎の名がみえます。また『古小笠原分限録』には、「旗本大将列小立野村城主、後畑再興寺城主ナリ、櫛木紀伊守政盛、二十騎ノ将」と書かれて波田に住んだことが判ります。

櫛木氏の波田へ入った時代は、明らかではないが『旧東筑摩郡誌』によれば「再興寺城址、正長年中（1428）櫛木正盛ここに居りしが事蹟明らかにならず。」とある。

波田郷での在住期間も明らかでないが、二代五十年のほど間といわれる。

時代考証としては、上波田の町道バイパス工事のための発掘調査中に城跡の切り岸に近い辺りの土中から出土した銅錢三枚の内、文字の鮮明な「大和通宝」は安南（今のベトナム）で作られた銅錢であり、大和年間（1443～1453）製が貿易船で日本に持ち込まれて流通したのだから、櫛木政盛が寛正三年（1463）にここに入ったとすると、古錢もほぼ同時代のもの。

また同所から出土した「内耳鍋」に破片は、戦国時代の武士が野営に用いて炊飯したといわれ戦国時代にもここが、城砦に使われていた傍証とも言えます。

櫛木城は上波田・水沢山若沢寺の別当寺といわれた無量山再興寺の境内の一部により中房山鬼神退治の祈願成就のため建立されたと伝えられる古寺。

京都から天台宗の高僧が別当職として下されていたといわれ、神事を兼帯し戸隠神社東光院栗田判官の支配下にあった。

南北朝の弘和・永徳（1381～84）ごろに一山に宗論がおこり、天台と真言の両派に分裂したという。室町時代の応仁元年（1467）には百瀬長昭が指揮し

て山号を村上の由緒により儀応山西光寺と改めると伝承されており、江戸時代にも寺領五石を持ち、上波田阿弥陀堂所蔵の古絵図には七堂伽藍の往時が描き残されているが、元禄四年に廃寺となり、若沢寺へ預けられた。

櫛木城は波田山城の内城であり、周辺には家臣の屋敷や鍛冶、番匠（大工）などの諸職人が集まり中世の城下町を形成しそれが本郷の原型となった。

波田町文化財保護委員  
百瀬 光信

## 集落道路 43 号（上波田バイパス）建設に関わる櫛木城跡遺構調査報告

波田町文化財保護委員会

上記道路建設が着工され櫛木城跡遺構が破壊される恐れがあったので波田町教育委員会の要請により文化財保護委員会では 1995 年 2 月 8 日 9 日に櫛木城二郭跡の東西にある二つの空堀跡と思われる地形の緊急調査を行なった。以下上波田集落センターよりの谷地形を東堀、櫛木城跡記念碑脇の谷地形を西堀と仮称する。

西堀 工事施工業者との連絡がよく取れていなかったので、立木伐採後の抜根工事が先行して、原地形が破壊され基本調査が十分にできなかつた。

原地形は上波田集落センターから瀬東に通ずる段丘崖に付けられた町道の上方で幅 12m、谷頭までの奥行 50m、道路面と城郭跡のある標高 732m の段丘面（波田面）との比高 13m 新設道路通過地点下により城郭面への最大傾斜 45 度を示し下位の段丘面（上海渡面）上に押し出した堆積をみない鋭い V 字形を示しているが、谷底には通常の沢底に見られる砂れきは見当たらない。このことはこの東谷は、城郭造営時に築かれた人工谷であることを裏付けている。

抜根の際重機によって解析された地形および集積された土の表面では、土壌などの遺構や中世の生活遺物は発見できなかつた。しかし右岸の幅先で近世の什器や从具等が数点採取された。また右岸最上部には小石や踏み固め跡など昔の赤線道路の痕跡が見られる。

西堀 東堀同様に段丘崖に直交する南北方向に形成された鋭い V 字谷地形で町道面（715m）での谷幅は約 10m で東堀より道路での比高が 5m 下がっているのにかかわらず、谷幅は小さい。奥行 80m は新設道路通過予定地点での最大傾斜は右岸で 45 度、左岸で 42 度と非対称で、左岸中ほどには崩落地形も見られる。上部面は東側の二郭のあった面より 1m 程高くなっている。

この西堀の谷地形も東堀同様上海渡面には堆積扇状地は形成されていない。ただ上海渡面には達していないが段丘の麓に自然堤防状の土砂の堆積が見られる。しかし、谷の大きさにくらべて堆積量は極めて小さい。このことは西堀が自然に造られた谷地形ではなく、人為的に掘られたものであることを示す証拠の一つである。西堀も伐採、抜根作業によって現地形は変えられた。

この時崩落した土のなかから縄文中期の土器片、中世の灰ゆう陶器の完形等が採集された。

西堀右岸、バイパス通過地点で調査した段丘崖の堆積のようすはつぎのようである。(1図)

- 1) 表土(黒色・植土) 60cm~70cm いわゆる耕土
- 2) 黒褐色土(ローム混じり黒色土) 30cm~40cm
- 3) 黄灰色ローム(水分を含むと黄褐色) 200cm  
御岳・乗鞍岳起源の火山灰層、いわゆる波田ローム
- 4) 亜円れき混じりローム 25cm~30cm —No.5 基準点—
- 5) 亜円れき層 300cm 一波田れき層—
- 6) ローム混じりれき 150cm
- 7) 表土混じりローム 150cm
- 8) 崩積土(永年にわたる崩落と伐採後の抜根による新しい土)
- 9) 黑灰色れき層 320cm (町道面) 一波田れき層—
- 10) 法面上の黒色腐食土は 10cm~15cm で表土としては薄い
- 11) 谷形断面図(2図)に示すようである

なおこの西堀はボーリング調査で人為的な谷であることが確かめられている。(3図)

今回の調査で上の6)・7)・8)などの事実から西堀が人為的な谷地形であることが確認されたが、段丘崖および東西の二つの谷地形の断面では“切り岸”上に櫛木城築城時に造られたと想定される“土塁”は確認できなかった。このことは、信府統記にあるように“江戸末期に城館跡は、破壊され切り岸の法面のみ存在する”ことと、掘り割りがその後、道路として利用されたこと、跡地を菜園、桑畠、水田などに造成するとき用土を大量移動したことなどによるものと推定される。

集落道路43号建設にともなって、波田町の歴史遺跡が一部であるが壊されてしまったことは残念であるが、ここ東西二つの谷地形が人為的に造成された掘り割りであること、中世の遺物がわずかではあるが採集されたこと、地域の人々が今までより史跡や文化財に关心寄せるきっかけをつくりえたことなど利するものもあった。

なおす後、西堀の西側の一郭(リンゴ園)切り岸での試掘作業中に縄文中期と思われる住居跡、中世以後に利用されたと思われる敷き石面などが発掘され、今後の調査が待たれている。





## 道路建設に伴う植物相並びに植生調査報告

調査者：日本生態学芸員・長野県植物研究会員 松田 行雄

本調査は西光寺城跡・櫛木城跡の一角（段丘斜面）を通る道路建設「上波田バイパス」に伴う現在（1995年）の植物相並びに植生（植物群落）を記録することを目的とした。従って調査結果をもとに環境保全、植物相、植生の保護について提言できるものではない。それは調査開始以前に道路建設工事が開始されていたからである。

植物相並びに植生調査した地点は、波田町上波田（西光寺城跡・櫛木城跡）段丘斜面の標高約740m～760mの約2haの地域である。調査期間は1994年12月25日～1995年6月31日までの夏期、秋期を除いた6ヶ月間である。

### 調査方法

植物相調査：調査地全域を4月から6月にかけて調査し、出現する植物を全て記録した。記録されたものを科別に整理し、各種類の分布状況や貴重種を資料「日本植物誌、長野県植物誌チェックリスト（1995年度版）、日本の絶滅危惧植物（日本植物分類学会編）」を参考に検討した。

植生（植物群落）調査：現在、植物群落を調査する場合は、植物社会学的手法（Braun-Blanquet 1964）が採用され、調査結果を他地域の植生と比較することによって、調査地域の植生がどのような群落から構成されているが決定されている。今回の調査もこの手法によって調査した（植生調査表 対照番号1、2）。調査内容は表から読み取れるように調査地（1/5万の地形図の図幅名と位置）海拔、環境としては群落の成立する地形、地質、風向、日向、湿り気等である。群落の形成状況を把握する目的で高木・亜高木・低木・草本層に分け、優占種、樹高、被覆率（調査地域を覆う割合）等30数項目にわたって調査した。各種類の量と生育状態はつぎの基準を使用した。

植物の量は被度（被覆の度合い COVERAGE）と個体数を組み合わせた優占度（DOMINANCE）の階級で表す。下記の基準に従って測定し記録した。

優占度の階級 5. 調査面積の3/4以上を覆う。個体数は任意。

4. 1/2から3/4を覆う。個体数は任意。

3. 1/4から1/2を覆う。個体数は任意。

2. 1/10から1/4を覆うか、あるいは個体数が多い。

1. 個体数は多いが被度が低い。

あるいは散生するが被度が高い（ただし1/10以下）。

+. 被度は低く散生。

生育状態は階層別に種類ごとの郡度（SOCIABILITY）で測定する。

郡度の階級 5. 同一個体の枝葉が相互に接觸して全面を覆う。

いわゆる純群落の状態。

4. 郡度 5 の状態に穴があいている。

また他種が穴の部分に生育している。

3. 郡度 4 の植物被覆部分と穴の部分が逆の関係になっている。

2. 郡度 3 が小規模になったもの。

1. 単独で生育する状態。

（例；植生調査表の高木層の欄に、4・4 スギ とあるのは、  
スギの優占度は4、郡度は4を示す）

### 調査結果と考察

植物相（生育する植物の種類） 資料 1～3 頁

調査域に出現する種類は「波田町上波田段丘斜面の植物相」に纏めたように 77 科 203 種にのぼり、波田町誌に記載されている波田町産植物（維管束植物）の 15.7% に当る。各種類について、上記の資料に当り検討した。その結果分布上また絶滅危惧植物は生育しない。しかしケンボナシの大木やヤダケの生育に注目したい。それは段丘斜面や山麓部を特徴づけるケヤキ群落の標識種であるケンボナシや戦国時代植栽されたと思われるヤダケの生育が確認できたことである。潜在植生を示唆する植物（ケンボナシ・ケヤキ・ヤマブキ・コクサギ）の確認や、歴史的に意味のあるヤダケ群落の確認はこれからも存続させたい植物や群落である。その意味からも段丘斜面の保全が今度の課題になる。

植生（植物群落） 資料 4～5 頁

段丘斜面は写真 1 や群落構成種から認められるようにスギ植林地で、潜在植生はケヤキ・コクサギ群落の成立する立地である。この立地はスギ植林適地であるため生育も良く、樹高 18～30m、胸高直径約 40～60cm となって、樹冠を 80～90% 被っている。

植生調査表の対照番号 1（写真 2）の植生

調査地点は旧道より上の斜面で、傾斜が約 40 度近い立地である。斜面にはスギの枯葉が堆積し、草本層の生育は貧弱である。その理由は高木層の常緑のスギが年間を通じて繁茂し、日光が僅かしか地表に到達しないことに因る。亜高木層も同様である。この斜面にかけて植栽されたヤダケがからうじて群生している。この生育部分は高木層に落葉広葉樹が生育することによる。群生構成種は 41 種類でその構成種の中には植林される以前の植生を知るケヤキ・ヤマブキ・コクサギ等の種類が生育している。

### 植生調査表の対照番号2（写真3、4）の植生

調査地点は旧道より下の斜面で、傾斜が約30度近い立地である。生育する植物の状態は前調査地とほぼ同じであるが、潜在植生を示すケンボナシが高木層に生育する。ヤダケの生育は僅かに生育が確認できる程度である、この植域は落葉広葉樹が高木層に多いところから群落構成種もやや多い。

### まとめと提言

調査の結果送球に植物相並びに植物群落に保護すべきものは認められなかった。しかし段丘斜面と上面（果樹園・畠地）との間に形成されていた林縁群落（マント群落）が取り払われたところから、林内は風通しが良くなり、日光も群落内部まで届き、今後環境の変化が予想される。従って潜在植生を示す植物群の変化が予想される。現在の景観を持続させるためには、スギ植林地を取巻く環境を道路建設前に戻すことが要求される。そのためにはバイパス道路とスギ植林地の間に林縁群落を造成することである。その際注意して欲しい点は地元の植物を使用することである。また将来的には郷土の景観保持の面からスギの伐採時期や伐採方法を考えることも大切である。

なお計画段階では空堀に橋を架けると聞いていたが、予想と違った工法で仕事がすすみ将来的に法面の保全は良いのか。また法面に植栽された植物は在来の植物相や群落構成種に影響を与えないか疑問に思う。

以上。

## 波田町上波田（西光寺城跡・櫛木城跡）段丘斜面の植物相

### シダ植物

オシダ科；イヌワラビ・オシダ・クサソテツ・クマワラビ・ナライシダ・ヘビノネゴ  
ザ・ヤブソテツ  
ウラボシ科；ノキシノブ  
チャセンシダ科；トラノオシダ  
キジノオシダ科；ヤマソテツ  
トクサ科；スギナ

### 裸子植物

イヌガヤ科；カヤ・ハイイヌガヤ  
イチイ科；イチイ（逸出）  
マツ科；カラマツ（植栽）  
ヒノキ科；サワラ（植栽）・ヒノキ（植栽）  
スギ科；スギ（植栽）

### 被子植物

#### 单子葉植物

イネ科；アオカモジグサ・イチゴツナギ・イブキヌカボ・オオウシノケグサ・オ  
ギ・カモガヤ・キツネガヤ・シナノザサ・スズメノカタビラ・チコザサ・  
チヂミザサ・トボシガラ・ナガハグサ・ヤダケ  
スゲ科；アオスゲ・オオカワズスゲ・タガネソウ・ヒゴクサ  
サトイモ科；カラスビシャク・マムシグサ  
ツユクサ科；ツユクサ  
ユリ科；アマドコロ・ウチワドコロ・タチシオデ・タマガワホトトギス・チゴユ  
リ・ノビル・ヒメニラ・ミヤマナルコユリ・ヤブカンゾウ・ヤマガシュウ  
ラン科；ミヤマウズラ

#### 双子葉植物

離弁花類  
センリョウ科；ヒトリシズカ  
ヤナギ科；イヌコリヤナギ・カワヤナギ・バッコヤナギ  
クルミ科；オニグルミ  
カバノキ科；ツノハシバミ  
ブナ科；クリ・コナラ

ニレ科；エノキ・ケヤキ・ハルニレ  
クワ科；カラハナソウ・クワ・ヤマグワ  
イラクサ科；アカソ・イラクサ・ウワバミソウ  
タデ科；イタドリ・ウナギツカミ・エゾノギシギシ・オオミゾソバ・スイバ・  
ツルタデ・ママコノシリヌグイ・ミゾソバ・ミズヒキ  
アカザ科；アカザ  
ヒュ科；イノコズチ  
ナデシコ科；ウシハコベ・ハコベ・ナンバンハコベ・ノミノフスマ・ミミナグサ  
フサザクラ科；フサザクラ  
キンポウゲ科；サラシナショウマ・ハンショウヅル・ボタンヅル  
アケビ科；アケビ・ミツバアケビ  
ツズラフジ科；アオツヅラフジ  
モクレン科；ホオノキ  
クスノキ科；アブラチャン・ダンコウバイ  
ケシ科；クサンオウ・ムラサキシキブ  
アブラナ科；イヌガラシ・ジャニンジン・タネツケバナ・タテノウミコンロン  
ソウ・ナズナ  
ベンケイソウ科；ベンケイソウ  
ユキノシタ科；タマアジサイ・ケバイカウツギ・ヤマアジサイ  
バラ科；アズキナシ・キンミズヒキ・クマイチゴ・ナワシロイチゴ・ニガイチゴ・  
ノイバラ・ヘビイチゴ・モミジイチゴ・ヤマブキ  
サクラ科；ウワズミサクラ・カスミザクラ  
マメ科；イタチハギ・クサフジ・クズ・シロツメクサ・ヌスピトハギ・ハリエン  
ジュ・フジ・ホドイモ・ムラサキツメクサ・ヤブマメ・ヨツバハギ  
フウロソウ科；ゲンノショウコ  
カタバミ科；カタバミ  
ミカン科；コクサギ・サンショウ  
ニガキ科；ニガキ  
ウルシ科；ツタウルシ・ヌルデ・ヤマウルシ  
ニシキギ科；コマユミ・ツリバナ・ツルウメモドキ・ツルマサキ  
ミツバウツギ科；ミツバウツギ  
カエデ科；ウラゲエンコウカエデ・ウリハダカエデ・オオモジ・チドリノキ・  
ハウチワカエデ・ミツデカエデ  
トチノキ科；トチノキ  
ツリフネソウ科；キツリフネ  
クロウメモドキ科；ケンボナシ

ブドウ科；ツタ・ノブドウ。ヤマブドウ  
すみれ科；アケボノスマリ・ケマルパスミレ。タチツボスマリ  
キブシ科；キブシ  
アカバナ科；アレチマツヨイグサ・ミズタマソウ  
ウコギ科；ヤマウコギ  
ミズキ科；アオキ（逸出）  
セリ科；ヤブジラミ・ヤブニンジン・ヤマゼリ  
合弁花類  
リョウブ科；リョウブ  
ツツジ科；ヤマツツジ・ネジキ  
サクラソウ科；オカトラノオ  
ハイノキ科；タンナサワフタギ  
モクセイ科；イボタノキ  
ヒルガオ科；コヒルガオ・ヒルガオ  
ムラサキ科；キュウリグサ  
クマツヅラ科；ムラサキシキブ  
シソ科；オドリコソウ・カキドウシ・ナギナタコウジュ・ヒキオコシ・ヒメオ  
ドリコソウ・ホトケノザ  
ゴマノハグサ科；オオイヌノフグリ・タチイヌノフグリ  
ハエドクソウ科；ハエドクソウ  
オオバコ科；オオバコ  
アカネ科；アカネ・ヤエムグラ  
スイカズラ科；ガマズミ  
レンブクソウ科；レンブクソウ  
オミナエシ科；オトコエシ  
ウリ科；キカラスウリ  
キク科；アカミタンボポ・アキノノゲシ・エゾタンボポ・オヤマボクチ・コオニ  
タビラコ・セイヨウタンボポ・ノブキ・ナンブアザミ・ハルジョオン・  
ヒヨドリバナ・ヒメムカシヨモギ・ヒメジョオン・フキ・ブタクサ・  
ヤブタビラコ・ヨモギ



写真1. 「上淀田八代久保」の前面工事の進行(7月22日撮影)  
環境保護のため、木質部分を切り落とす



写真2. 沿道上の斜面の植生。ヤシナガリ生育場所。

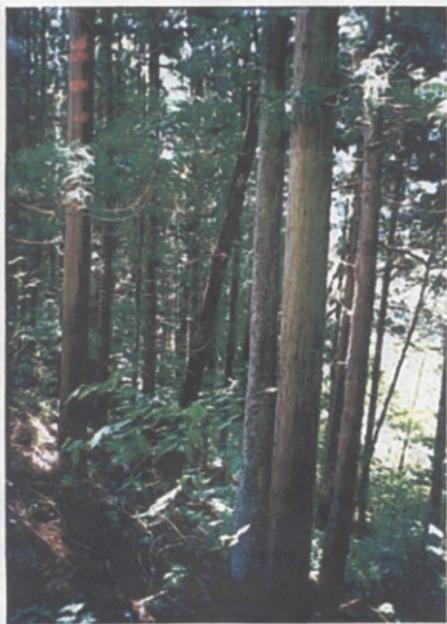


写真3. 旧道路下の植生。400m付近の大木がみつかる。



写真4 旧道路下の小林の植生



写真5 新しく設置された空港にかかる下橋？ 沿線の工事等  
今後、探査してみる。